

## 埼玉古墳群をめぐる研究者たち

井上 尚明

2015年4月以降、埼玉県の考古学研究者が相次いで逝去された。4月7日に栗原文蔵さん、6月12日に駒宮史郎さん、そして6月18日には金井塚良一さんが亡くなられた。3人ともにさきたま資料館（現在のさきたま史跡の博物館）に在籍されたことがあり、埼玉古墳群に関する論文や報告書を多数執筆されている方々である。

これまでも、柳田敏司さんや小川良祐さん・増田逸朗さんといった、埼玉古墳群の保護やさきたま資料館建設に尽力され、埼玉古墳群研究の基礎を築いた先輩たちが逝去されているが、新年度になってすぐに届いた、立て続けの訃報に少なからず衝撃を受けた。

吉見百穴の研究で知られる金井塚さんであるが、退職されてからもバイタリティー溢れる研究を続けられた。埼玉古墳群に関しては多くの文章を残しておられるが、『馬冑が来た道』では將軍山古墳出土の馬冑をテーマに、中国や朝鮮半島の資料をも駆使したダイナミックな論を展開している。昭和60年度から63年度まで、館長として瓦塚古墳の調査などを指揮されるとともに、多くの論文などを発表している。



写真1：昭和60年4月14日（日）の入館者200万人目の記念撮影。金井塚さんの隣は当時副館長であった横川さん。

金井塚さんとは県立博物館（現在の歴史と民俗の博物館）の館長時代に、学芸員として御一緒したことがあるが、随分とわがままを言って埋蔵文化財調査事業団に異動させていただいた記憶がある。その後も時々博物館や遺跡などでお会いすることはあったが、世間話や仕事の話はしたことがなかった。私の専門ではない古墳時代の話題が専らであったが、思いついたように今何を書いているかなどを聞かれることもあり、研究者としての付き合いをして頂いたように思う。

行田の出身である栗原さんは、埼玉県が採用した学芸員第1号であり、私が埼玉県教育局に就職した当時の直属の上司としてもお世話になった。昭和43年の稲荷山古墳の礫槨の発掘調査に参加され、昭和48年度にはさきたま資料館の学芸課長として稲荷山古墳の周堀の調査を担当されている。



写真2：昭和42年11月に撮影された写真：最前列の栗原さんのほかに、増田さん・駒宮さん・今泉さんが一緒に写っている。古墳の大きさから、奥の山古墳か？

栗原さん独特の口調で、上下関係なく正論を貫く姿は、多くの同僚や後輩たちの印象に残っていると思うが、「埼玉のご意見番」として貴重な存在でもあった。栗原さんの部下であった時に、夕方出張から県庁に戻ったところ、「この時間に戻るなら、博物館か遺跡でも見てくるように」と言われたことがある。その後、この言葉どおりに多くの遺跡に行き、県内の大部分の博物館や資料館を見る機会を得ることができた。このことは、その後の研究や仕事にも大いに

役立ち、私が部下を持った時には、栗原さんと同じような台詞を言いたいと思ったものである。

県庁に入るまでは、栗原さんと面識はなかったが、私の恩師である稲生典太郎先生とも懇意であったため、初対面の時に先生から話は聞いていると告げられ、急に身近に感じたことを覚えている。もう、30数年前のことである。

駒宮さんとは、栗原係長のもと教育局文化財保護課第2係（当時）の職員として、現場の立ち会いや調整・試掘、さらに私生活でも多くの時間をご一緒させていただいた。埼玉の地形・土地勘や遺跡に関する知識の基礎は、駒宮さんとの時間で養われたといっても過言ではない。学生時代には、報告書などで最も多く目にした埼玉の研究者は駒宮さんであり、その駒宮さんと机を並べることになった時には大いに緊張した。しかし、気さくな人柄とユーモアで、その後30年以上お付き合いいただいた。



写真3：まが玉作りで子供たちに作り方を説明している写真（平成17年10月撮影）。

埼玉古墳群の調査に関しては、学生時代から参加されており、県に就職後も昭和63年に戸塚口山古墳の調査を担当し、その後平成16年度から18年度まで副館長として、稲荷山古墳の前方部復元整備などの指導をされた。私をはじめてさきたま史跡の博物館に異動してきた時の副館長で、久しぶりに一緒に仕事ができ、整備計画策定などでバックアップいただいた。

埼玉古墳群と関わりの深い、3人の先輩たちが同じ年に相次いで亡くなられたが、特に一番若く、亡くなる1週間ほど前にお会いしたばかりの駒宮さんの訃報を聞いた時には、何かの間違ひではないかと思ったほどである。この文章と並行して製鉄遺跡についての原稿を書いているが、駒宮さんが執筆された『甘粕山』の炭焼窯跡の考察を読んで、その緻密さや先見性に驚かされ、良質な報告書や考察は何年経過しても色あせないことをあらためて教えられた。

埼玉古墳群の近くにお住まいで、「時々来るよ」とっていた姿が忘れられない。

埼玉県の学芸員の中で、金井塚さん・栗原さん・駒宮さんの3人を知り、一緒に仕事をしたことのある者はほとんどいなくなってしまった。しかし、多くの著作・論文・報告書にはそれぞれの業績が残されており、消えることはない。3人が長い時間をかけて調査し研究してきたことは、これからも埼玉古墳群の研究や整備に生かされ、執筆された文章は多くの研究者に引用され続けるに違ひない。埼玉古墳群の調査や整備に関わる者、あるいはこれから携わる者は、先学の意志や研究を引き継ぎ、そして乗り越える努力を惜しまないでほしい。それこそが3人の研究者への追悼にほかならない。

あらためて3人のご冥福を祈りたい。

金井塚良一 2008 『馬冑の来た道』 吉川弘文館

北武蔵古代文化研究会 2004 『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』

関義則 2013 「さきたま風土記の丘整備事業と柳田敏司氏」『埼玉県立史跡の博物館紀要第6号』